

長谷川君と余

夏目 漱石

長谷川君と余は互ひに名前を知る丈で、其他には何の接觸もなかつた。余が入社の當時すらも、長谷川君が既にわが朝日の社員であるといふ事を知らなかつた様に記憶してゐる。それを知り出したのは、どう云ふ機會であつたか今は忘却して仕舞つた。兎に角入社しても暫らくの間は顔を合せずにゐた。しかも長谷川君の家は西片町で、余も當時は同じ阿部の屋敷内に住んでゐただから、住居から云へばつい鼻の先である。だから本當を云ふと、此方から名刺でも持つて訪問するのが世間並の禮であつただけれども、そこをつい怠けて、何處が長谷川君の家だか聞き合せもせずに横着を極めて仕舞つた。すると間もなく大阪から鳥居君が來たので、主筆の池邊君が我々十餘人を有樂町の俱樂部へ呼んで御馳走をしてくれた。余は新入の社員として、其時始めてわが社の重なる人と食卓を共にした。そのうちに長谷川君もゐたのである。これが長谷

川君でと紹介された時には、かねて想像してゐた所を、あまりに隔たつてゐたので、心のうちでは驚ろきながら挨拶をした。始め長谷川君の這入つて來た姿を見たときは——又長谷川君が他の昵懇な社交とやあとといふ言葉を交換する調子を聞いた時は——全く長谷川君だとは氣が付かなかつた。たゞ重な社員の一人なんだらうと思つた。余は若い時から色々愚な事を想像する癖があるが、未知の人の容貌態度杯はあまり腦中に描かない。ことに中年からは、此方面にかけると全く散文的になつて仕舞つてゐる。だから長谷川君に就ても別段に鮮明な豫想は持つて居なかつたのであるけれども、冥々のうちに、漠然とわが腦中に、長谷川君として迎へるあるものが存在して居たと見えて、長谷川君といふ名を聞くや否やおよと思つた。尤も其驚ろき方を解剖して見るとみんな消極的である。第一あんなに脊の高い人とは思はなかつた。あんなに頑丈な骨格を持つた人とは思はなかつた。あんなに無粹な肩幅のある人とは思はなかつた。あんなに角張つた顎の所有者とは思はなかつた。君の風手はどこからどこ迄四角である。頭迄四角に感じられたから今考へると可笑しい。其當時「その面影」は讀んでゐなかつたけれども、あんな艶つぽい小説を書く人として自然が製作した人間とは、とても受取れなかつた。魁偉といふと少し大袈裟で悪いが、いづれかといふと、それに近い方で、到底細い筆杯を握つて、机の前で呻吟してゐさうもないから實は驚ろいたのである。然し其上

にも余を驚ろかしたのは君の音調である。白狀すれば、もう少しは浮いてるだらうと思つた。所が非常な呂音で大變落ち付いて、緩くりした、少しも逼る所のない話し方をする。しかも余に紹介された時、君はたゞ一二語しか云はなかつた。(尤も余も同じ分量位しか挨拶に費やさなかつたのは事實である。)其言葉は今全く忘れてゐるが、普通にありふれた空虚な辭令でなかつたのは慥かである。寧ろ双方で無愛想に頭を下げたのだつたらうが、自分の事は分らないから、相手の容子丈に驚ろくのである。文學者だから御世辭を使ふとなると、外の諸君に濟まなけれども、實を云へば長谷川君と余の挨拶が、あゝ單簡至極に片付かうとは思はなかつた。——是等は皆豫想外である。

此席上で余は長谷川君と話す機會を得なかつた。たゞ黙つて君の話しを聞いてゐた。其時余の受けた感じは、品位のある紳士らしい男——文學者でもない、新聞社員でもない、又政客でも軍人でもない、あらゆる職業以外に嚴然として存在する一種品位のある紳士から受くる社交的の快味であつた。さうして、此品位は單に門地階級から生ずる貴族的のものではない、半分は性情、半分は修養から來てゐるといふ事を悟つた。しかも其修養のうちには、自制とか克己とかいふ所謂漢學者から受襲いで、強ゐて己を矯めた痕迹がないと云ふ事を發見した。さうして其幾分は學問の結果自から此に至つたものと鑑定した。又幾分は學問と反對の方面、即ち俗に云ふ苦勞をして、野暮を洗ひ落とし

て、さうして再び野暮に安住してゐる所から起つたものと判断した。

其うち、君は池邊君と露西亞の政黨談をやり出した。大變興味があると見えて、何時迄立つても已めない。妮々數千言と云ふと無暗に能辯に喋舌る様に聞こえてゐる。いが、時間から云へば、斯んな形容詞でも使はなくつてはならなくなる位論じてゐた。其知識の詳密精細なる事は又格別なもので、向つて左りの何の邊に誰がゐて、其反對の側に誰の席がある杯と、丸で露西亞へ昨日行つて見て來た様に、例の六づかしい何々スキー杯と云ふ名前がいくつも出た。然し不思議にも此談話も、物知り振つた、又通がつた陋惡な分子を一點も含んでゐなかつた。余は固より政黨政治に無頓著な質で、かつて今の衆議院の議長は誰だつたかねと聞いて友達から笑はれた位の男だから、露西亞に議會があるかないかさへ知らない。従つて此談話には何等の興味もなかつた。それで、あんまり長いから、談話の途中で失敬して家へ歸つて仕舞つた。是が余の長谷川君と初對面の時の感想である。

それから、幾日か立つて、用が出來て社へ行つた。汚ない階子段を上がつて、編輯局の戸を開けて這入ると、北側の窓際に寄せて据ゑた洋机を圍んで、四五人話しをしてゐるものがある。外の人の顔は、戸を開けるや否やすぐ分つたが、たつた一人余に背中を向けて椅子に腰を卸ろして、鼠色の脊廣を着て、長い胴を椅子の脊から食み出さして

ゐたものは誰だか見當が付かなかつた。横へ回つて見ると、それが長谷川君であつた。其時余は長谷川君に向つて、「一寸御訪ねをしようと思ふんだが」と言ひ出して、まだ句を切らないうちに、君は「いや低氣壓のある間は來客謝絶だ」と云つた。低氣壓とは何の事だか、君の平生を知らない余には不得要領であつたけれど、來客謝絶の四字の方が重く響いたので、聞き返しもしなかつた。たゞ好い加減に頭の悪い事を低氣壓と洒落れてゐるんだらう位に解釋してゐたが、後から聞けば實際の低氣壓の事で、苟しくも低氣壓の去らないうちは、君の頭は始終懊惱を離れないんだといふ事が分つた。當時余も君の向ふを張つて來客謝絶の看板を懸けてゐた。尤も是は創作の低氣壓の爲であつたけれども、來客謝絶は表向き双方同じ事なんだから、此看板を引き下させる丈の縁故も親しみもない兩人は、夫切り面談をする機會がなかつた。

所がある日の午后湯に行つた。着物を脱いで、流しへ這入らうとして、不圖向ふむぎになつて洗つてゐる人の横顔を見ると、長谷川君である。余は長谷川さんと聲を掛けた。夫迄は丸で氣が付かなかつた君は、顔を上げて、やあと云つた。湯の中では夫れぎりしか口を利かなかつた。何でも暑い時分の事と覺えてゐる。余が身體を拭いて、莫産の敷いてある縁先で、團扇を使つて涼んでゐると、やがて長谷川君が上つて來た。まづ眼鏡を掛けて、余を見付け出して、向ふから話しを始めた。双方とも真赤裸の様に

記憶してゐる。然し長谷川君の話し方は初対面の折露西亞の政黨を論じた時と毫も異なる所なく、呂音で落ち付いて、緩くりしてゐるものだから、全く赤裸と釣り合はない。君は少しも顧慮する氣色も見えず醇々として頭の悪い事を説かれた。何でも去年とか一度卒倒して、しばらく田端邊で休養してゐたので、今ぢや少しは好い様だとかいふ話しであつた。「それぢや、まだ來客謝絶だらう」と冗談半分に聞いて見たら、「まあ……」とか何とか云ふ返事であつた。「それぢや、行くのはまあ見合せ様」と云つて分かれた。

其秋余は西片町を引き上げて早稲田へ移つた。長谷川君と余とは此引越のため益縁が遠くなつて仕舞つた。其代り君の著作にかゝる「其面影」を買つて來て讀んだ。さうして大いに感服した。(ある意味から云へば、今でも感服してゐる。こゝに余の所謂ある意味を説明する事の出来ないのは遺憾であるが、作物の批評を主にして書いたものでないから已を得ない。)そこで、手紙を認めて、聊かながら早稲田から西片町へ向けて贊辭を郵送した。實は腦病が氣の毒でならなかつたから、こんな餘計な事をしたのである。其當時君は文學者を以て自から任じてゐないなどは夢にも知らなかつたので、同業者同社員たる余の言葉が、少しは君に慰藉を與へはしまいかといふ己惚があつたんだが、文士たる事を耻づといふ君の立場を考へて見ると、これは實際入らざる差し出た

所爲しよゐであつたかも知れない。返事には端書はがきが一枚來た。其文句そのは、有難ありがたう、いづれ拜顔しやうげんの上とか何とかある丈だけで、頗すこぶる簡單かん且つあつさりしてゐた。ちつとも「其面影そのめんかげ」流しかでないのには驚おどろろいた。長谷川君の書に一種の風韻ふういんのある事も其時そのとき始めて知つた。然しかし其書體しよたいも決して「其面影そのめんかげ」流ではなかつた。

それから、ずつと打絶うちつたえた。次に逢あつたのは君が露西亞ロシアへ行く事が略内定ぼくした時のことである。大阪の鳥居君が出て來て、長谷川君と余を呼んで午餐じさんを共にした。所は神田川かんだがはである。旅館りやういんに落合おちあつて、彼處あそこにしよう、此處ここにしようと評議へうぎをして居る時に、君はしきりに食くひ物の話を持ち出した。中華亭ちゆうわていとはどう書いたかねと余に聞いた事を覺おぼえてゐる。神田川では、滿洲へ旅行した話やら、露西亞人ろしやじんに捕つかまつて牢らうへ打ち込まれた話をしてゐた。夫それから、現今の露西亞文壇ろしやぶんだんの趨勢すうせいの斷つえず變かつてゐる有様ようざやら、知名ちかの文學者の名なやら（其名はたくさんあつたが、みんな余の知らないもの許ばかりであつた）、日本の小説の賣うれない事やら、露西亞へ行つたら、日本人の短篇たんぺんを露語ろごに譯やくして見たいといふ希望きぼうやら、色々述べた。何しろ三人寐ねをべつて、一三時間暮くしてゐたのだから、随分ずいぶんゆつくり話も出來できた。最後にダンチエンコのために宴會うたひをやる積つもりだから出席しゆじして呉くれるといふ事と、それから物集ものづめの御嬢おんなさんを、自分おれがゐなくなつたら托たくしたいといふ二件にけんを依頼いらいした。それで分わかれた。

最後に逢つたのは、出立の數日前暇乞に來られた時である。長谷川君が余の家へ足を入れたのは是が最初であつて又最終である。座敷へ通つて、室内を見渡して、何だか伽藍の様だねと云つた。暇乞の爲だから別段の話も出なかつたが、たゞ門弟としての物集の御嬢さんと今一人北國の人の事を繰り返して頼んで行つた。

一日越えて、余が答禮に行つた時は、不在で逢へなかつた。見送りにはつい行かなかつた。長谷川君とは、それ限り逢へない事になつて仕舞つた。露都在留中たゞ一枚の端書をくれた事がある。それには、弱い話だが此方の寒さには敵はないとあつた。余は其端書を見て氣の毒のうちにも一種の可笑味を覺えた。まさか死ぬ程寒いとは思はなかつたからである。然し死ぬ程寒かつたものと見える。長谷川君はとう／＼死んで仕舞つた。長谷川君は余を了解せず、余は長谷川君を了解しないで死んで仕舞つた。生きてゐても、あれ限りの交際であつたかも知れないが、あるいは、もつと親密になる機會が來たかも知らない。余は以上の長谷川君を、長谷川君として記憶するより外に仕方のない遠い朋友である。君の托されて行つた物集の御嬢さんは時々見える。北國の人に至つては音信さへない。